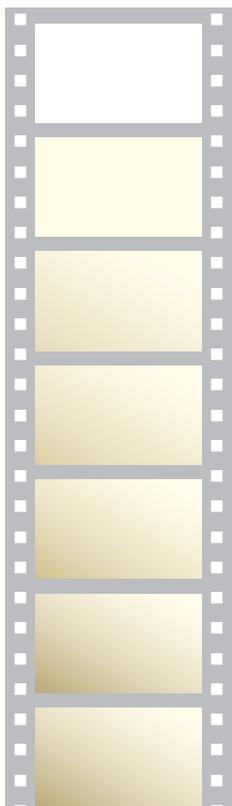


伸<sup>ノブ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



## 第十四回 「いまーゴジラ」

幼少の頃、母が連れてつてくれた映画で怖かった映画がもう一本あります。それは「ゴジラ」（54年製作）（昭和29年11月3日封切・本多猪四郎監督・宝田明・河内桃子出演）。

ぼくが小学校に入学した秋、11月3日（文化の日）に公開されています。第一作目の「ゴジラ」には「水爆大怪獣映画」というサブタイトルがついていますが、そのタイトルが怖さを倍にしているようでした。モノクローム（白黒）の映画だったので、怖さはこれで倍増しました。

この作品は、54年（昭和29年）3月1日、マグロ漁船第五福竜丸が太平洋のビキニ環礁で水爆実験に遭遇し、乗組員全員が被爆したニュースをきっかけに製作されました。去年（平成22年）映画監督を引退した新藤兼人監督の「第五福竜丸」（59年製作・宇野重吉・乙羽信子出演）という実話に基づいた映画化作品もあります。

アメリカの水爆実験の落とし子「ゴジラ」の名の由来には説がふたつあります。

ひとつは「製作した東宝の社員のニックネームをヒントにした」という説。もうひとつは、日本を代表するシナリオライター、橋本忍さん（今年4月で93才）から「ゴリラとクジラの造語だよ」と聞いた説があります。

「ゴジラ」が封切られる前年（昭和28年）放送を開始したテレビジョンの中継放送も、映画本篇の中に入っていて、事実かと錯覚するほどの迫力でした。まして、昔は映画館で「〇〇新聞ニュース」など、ニュース映画も上映していましたから、水爆実験のニュースが上映されると、この世も終わりという気持ちになっちゃいました。そんな雰囲気なかで、映画は、テレビ中継を放送局の屋上から、また、テレビ塔の上から、男性アナウンサーが「ゴジラ」の動きを伝えていきます。

シーンナンバー171のシナリオ（村田武雄・本多猪四郎）から

171 テレビ塔の上

決死の覚悟で写真を撮っている報道陣

ニュースカメラマン

マイクに叫ぶアナウンサー

「いよいよ、ゴジラはただいまこの放送を送っておりますテレビ放送のアンテナに向けて進んでまいりました。

我々の命もどうなるかわかりません。

もしこの塔が倒されるとすれば……

最期ですアツ、ゴジラは我々のほうを見たようです。……ますます近づいてまいりましたッ、いよいよ最期です。アツこの鉄塔に向かって突進してまいりました。あと20m、いや15m!!

右手を塔にかけましたッものすごい力ですッ

もう最期です。さようならッ

皆さん、さようなら!!」

と絶叫で伝えていました。それを見ていた小学一年生のぼくは、幼心にも「アナウンサーは身を投じて他人のために尽くすことができるすばらしい職業だ」とあこがれを抱いたのです。

(続)

伸

平成23年3月